

十八世紀フランスの『婦人の百科文庫』の序文を読む

小山 美沙子

齢を重ねて心の琴線が擦り切れてしまったのか、はたまた、詩情を蹴散らす情け容赦ない現実には打たれ続けて、神経が摩耗したのか、このところ、何を讀んでも、どこか白けた自分がいて、やるせない思いに沈むことがある。そればかりか、本屋の店頭で山と積まれた「〇〇賞受賞」と銘打たれた話題の小説本を気まぐれな好奇心から手に取り、冒頭の五〇六行に目を通すや、はや興を削がれ、パタンと表紙を閉じてしまうのが、ほぼ習慣のようになっていた。勿論、それは、本稿筆者が特別高雅な趣味の持ち主であるからでも、文芸評論家並みの文学通であるからでもないことだけは確かである。恐らくは、同時代の現代小説に対する筆者自身の文学的感受性が、限りなくゼロに近いということだけのことだろう。したがって、小説の作者達にとっては、私のように鈍重な読者の掴みに失敗しても、どうということはないのである。

こうした書き出しで拙稿を始めたのも、筆者が、長年、十七〜十九世紀フランスの女性のための知的啓蒙書を研究対象にしてきて、読者を学びへと誘う⁽¹⁾、序文という著者からのメッセージに注目してきたからである。中でも、十八世紀末、パリで出版された『婦人の百科文庫』(一八八五〜九三年)⁽²⁾の序文は、短いものではあるが、これを当時の時代状況も念頭に置きながら改めて読み返してみると、様々な思いが沸き起こってきて興味が尽きない。以下、筆者自身による過去の研究成果も踏まえ、文庫の趣意書に当たる前書きのうち、特に内容案内に先立つ序の言葉を

辿りながら、あれこれ思いを巡らせてみたい。

知性陶冶のすすめ

『婦人の百科文庫』は、女性が百科にわたる幅広い教養を身に着けるための当時としては極めて野心的な叢書で、恐らくは出版開始から四年後に革命の混乱が始まったため、未完に終わったものの、小型版(十八折版)ながら計一五四巻が世に出たのであった。⁽²⁾分野別に十一の叢書群があり、地理の分野(既刊二〇巻)の第一巻(一八八五年)の序文が、全体の趣意書の役目をしている。その冒頭の言葉は、次のように始まっている。

「知性の陶冶が、若さと美貌を遥かにより好ましくするというのが真実なら、それがこのふたつの長所の欠如の埋め合わせになるといふことさえ真実であるのなら、我々の企てる叢書に対して、我々は好意的な歓迎を期待できるはずである。⁽³⁾」

執筆者名は明かされていないが、まずは、いきなりこうした意表を突く軽めの文言から始まっていることに、現代の読者なら驚きを感じるであろう。しかし、当時は、十七世紀以来高まるポピュラー・サイエンスの流行に代表される、サロンに集う男女の間での学問熱が目立った現象になっている一方で、モリエールが、喜劇『女学者達』(一六七二年)⁽⁴⁾で

戯画化して見せた女性の過度の学問好きを危惧する風潮も健在であったから、せっかく「婦人用」であることを明示する叢書名に、安堵し、誰はか憚ることなく文庫を手にした女性読者に対して、最初から、学識の意義を重々しく説き、学問の体系を滔々と述べたのではまずいという判断が働いたのではなからうか。

一方、当時の上層階級の男性ファッション、その身仕舞いを思い起こせば、外見への拘りは、決して女性に限ったことではないと理解できるのだが、それでも、女性の若さと美貌に価値を置いていることが明らか。この文面に、現代なら、違和感や反発を覚える女性達もいるであろう。当時の女性達が、どのように反応したのかは推測の域を出ないものの、気休めに過ぎない理屈とは思いますが、明らかに女性に気に入られることを意図した前口上に、まずは、につこりしたのではなからうか。

そもそも、「^⑦が真実ならば」という表現は、既に知られた理屈の存在を示唆している。それは、例えば、男女の知的平等と女性があらゆる学問に勤しむ権利のあることを主張した、思想家ブーラン・ド・ラ・バルの『両性の平等について』(一六七三年)^⑧に出て来る言葉を想起させるものである。彼は、女性にとつての学問の有用性を述べる行で、「知性の輝きによつてアップする身体の美の輝き」、「最も美しい女性も、機知に富んでいれば、いつでも良い目で見られるものであり、勉学によつて育まれた知性の利点は、自然あるいは運命が拒んだものを補う手段をたっぷり補ってくれるであろう」という、女性の学びを励ます言葉を記していた。知性が、欠如した美の補いになるという考えは、十八世紀、女性作家ビュイジュによる当時成功を博した女性への助言の書『ある友達への助言』(一七四九年)にも引き継がれ、この中で、「醜女は、容貌で自身に欠けているものを、自身の知性を豊かにすることでのみ贖うことができる」と^⑨とされている。

いや、そればかりか、現代に至るまで読み継がれてきたシャルル・ペローの知られた寓話のひとつ『巻き毛のリケ』(一六九七年)では、知性は醜い容貌の補完どころか、美貌を凌駕しさえするのである。(こゝでは、

美人だがおつむの弱い姫君(姉)と醜女だが才知に長けた姫君(妹)が登場し、サロンで男性達はまず美人を取り囲むものの、結局お話しの上手な才氣溢れる妹の方に皆が集まってしまうというエピソードが出て来る。ペローの時代(十七世紀)に確立し、フランスで最も花開いたと言われる、会話が重要な役割を果たすサロン文化の事が念頭にあれば領ける話である。

ところで、価値観の多様化の現象が認められる現代でも、「美と若さ」は、いまだ多くの女性達が求め続けているという現実には変わりはない。反発を覚える女性がいる一方で、案外すんなり受け入れてしまう女性もいるかもしれないのだ。ただ、ここでは、単なる美と若さの礼賛ではないところが重要で、むしろ、女性が価値を置いているものをいきなり前面に出して読者をぐつと引き付けながら、知的陶冶の重要性を効果的にアピールしようとしていると考えられる。要するに、本叢書で知性を育むことで、自らの若さと美貌に自信のある女性は、より魅力的になり、そうでない女性も、ふたつの美質の持ち主と同じくらい魅力的になれると暗に仄めかしているのである。

十九世紀、風刺画家のドーミエが、しばしば女性作家や女性の社会運動家を極端なまでに醜い容貌で描いて、知性と美貌は両立しないという女性神話を荒っぽいやり方でビジュアル化したことを思えば、たとえ、美と知性のポジティブな関係性はあくまでも仮定で、女性読者は単なる気休めとしか受け止めないにしても、嬉しい理屈と捉える可能性があるから、これは、女性を知性陶冶へと導く一種の誘い水になっていると考えられる。伝統的に女性達に刷り込まれてきた価値観も、ここではとりあえず、女性達を知へ誘う装置として使われていることになる。

もつと教養を!

さて、序文は、更に次のように続けている。

「知識がよりあまねく普及している今日、交際社会では、女性達にかつてよりも教養のあることが求められている。確かに、彼女達には教養があるのではあるか」⁽¹⁰⁾

「あまねく」と言っても、義務教育制度はなく、男子の間にさへ知的格差は存在していたのであるが、ここでは、『百科全書』（一七五一～七二年）の出版に代表される十八世紀という啓蒙の時代における知識普及の目立った動きを指していると思われる。

しかし、女子の場合は、大学は勿論、中等教育を担うコレージュからも締め出されている上に、その教育は親の階級と財力、方針に左右されていたから、一般には、男子以上に不利な状況にあった。とはいえ、上層階級の女性達の中には、家庭教師などによる個人レッスンや、読書などによって、修道院での不十分な教育を補うことができる恵まれた者もいた。しかし、知的職業への道が開かれていたわけでもなく、仕事に就くこと自体ありえない彼女達にとって、学ぶ動機は限られていた。それでも、彼女達にとつてとりわけ重要な活動の場であるサロンは、男女間のある程度共通な知的基盤の上に成り立っていたから、教養を積む必要があった。とりわけ、啓蒙の時代の十八世紀のサロンでは、あらゆることが話題なるため、より幅広い教養が求められた。その上、学問・芸術への関心の高まりを見せたルネサンスの時代に遡る、貴族を中心とした富裕層の女性達の学問熱は、この時代ますます拍車がかかったのである。こうした事情が、序文の言葉に反映していると思われるが、勿論、この文庫で教養を積みたいと思っている女性読者は、自分はまだ交際社会の要求する教養ある女性になっていないことを自覚していて、焦りを覚えるに違いない。ある程度教養を積んでいる女性も、まだ不十分かもしれないと心配になる可能性がある。更なる教養を積むことが必須であるとする文言で、女性読者を文庫の扉の更に向こうへと誘おうとしているのだ。

したがって、『婦人の百科文庫』の中で、サロンでの活動を念頭に置いて

た学びの重要性を読者に訴える文言に出会うのも理解できる。例えば、フランス語の発音の注意点を纏めた『発音概論』（一七八五年）の序文では、女性はその場で弁論をする機会があるわけではないが、「正確で滑らかな発音」は、「会話の興味を増す」し、「言語に新たな優美さを与える」として、学習のメリットを強調している⁽¹¹⁾。語末の子音字を発音するか否か、アンシェヌマンやリエゾンの有無などフランス語の発音の問題は、今でも案外厄介な学習事項であるが、会話が重要で、しかも、詩や散文の朗読もなされるサロンに集う教養人には欠かせない知識であった。

一方、『一般物理学』（全二巻、一七八八年）の序文では、激しい知識欲に駆られた女性達が、著者である物理学者シゴード・ラフォンの実験物理学講座に熱心に参加している様子が、「パリで私が実験物理学を教えた三十年以上の間、婦人達はほとんどいつでも私の受講者の大部分を占めており、いつでも彼女達は、その熱心さと光栄にも私に注いでくださった特別な関心で際立ったのです。彼女達は、知性に、女性に特有の明敏さに恵まれているので、誰も彼女達ほど容易に最も抽象的な真理を理解することはありませんでした⁽¹²⁾」と語られている。事実、この講座は、正確に理解する者はいませんでした⁽¹²⁾と語られている。事実、この講座は、サロンに集う女性達から人気を得ていた。後に彼は、パリから遠く離れた地方都市でも講座を開くが、ここでも、婦人達が熱心に通っていたことが序文で綴られている。これらは、実際のロールモデルの存在を示したことになる、科学も重要な話題のひとつであるサロンに集う女性達は勿論、それ以外の女性読者の学びをも励ます効果があるであろう。

書物の重要性和「有益で好ましい知識」

さて、学びへの意欲を掻き立てた後で、文庫の序文はこう続けている。

「しかし、女性達は、自身の蔵書を構成すべき本の選択に、何と多くの困難を感じていることだろう。旅行記（地理の分野）、歴史、哲学、

文学、科学、芸術といった、ある文学者グループが提供しうる有益で好ましい知識全てを収める叢書を構想したのは、こうした彼女達の苦勞を免れさせるためなのである。¹³⁾

書物は、男性にとって、重要な知識と知恵の源泉であったが、公教育の遅れが目立つ女性にあって、読書は、一層重要な知識獲得の手段になりえたと考えられる。¹⁴⁾ 事実、ルゼ・マルネシア侯爵は、若い女性のための読書案内書『ある若い婦人のための読書プラン』（一七八四年）で、「婦人達は、自身を啓蒙する大いに豊富な手段を持っている世の男性達よりも、遙かに書物からの啓蒙を必要としている」と言っていた。¹⁵⁾ しかし、どんな本を揃えればよいのか、更には、どういう手順で読んで行けばいいのかという問題が起きて来るだろう。彼の書は、そうした問題に応える女性用の読書指南書であった。『婦人の百科文庫』が、アルファベット順の百科事典ではなく、分野ごとに分かれた叢書群になっているのも、整理された知識を段階的に獲得して行けるよう配慮した結果と考えられる。

しかし、ここではまだ、極めて大雑把に分野を提示しただけである。しかも、既に百科の知識を予想させるような分野を併記する一方で、「有益で好ましい知識 (connoissances utiles et agréables)」を提供するとして、文庫が読むに値するものであることをアピールしている。同時にこれは、「あのモリエールが描いた女学者用ではありませんから」と、読者を安心させる暗黙のメッセージにもなっていると考えられる。確かに、例えば、哲学の分野は、倫理哲学であって、形而上学は扱われていない。数学では、算術や代数、幾何に加え、三角法まであるものの、さすがに微積分は扱われていない。したがって、これは知識レベルの限界を示していると言える。しかし、このキャッチコピーそのものは、後に知識の普及書の定番となる謳い文句なのである。また、分野名である「地理」とはしないで、当時流行りの「旅行記」(Voyages)としたのも(実際の文庫でも、書簡形式の旅のルポという体裁を取っている)、学問の堅苦しいイメージを多少なりとも和らげる効果を狙ったのかもしれない。しかも、筆

頭に「旅行記」を出したのも(事実、第一叢書群)、まずは気軽に読み始めてもらおうという作戦と思われる。

なお、個々の書物の序文を見てみると、有益性を強調する記載の方が案外目立つのも事実である。例えば、数学の分野(既刊九卷)の第一巻『算術』(全二巻、一七八九年)の序文は、この分野全体の前書きになっている。「数学は両性全体の領域に属す。これは、判断力を強化し、ある程度までこれを矯正しさえする、(……) 財産を計算し、所領地を計測し、お金を最も有効に利用する術を教えるのは数学である。数学に専心することで味わう楽しみは、苦痛と悲嘆を忘れさせてくれる。あらゆる学問の中で、数学だけが費用のかかる機械も多くの蔵書も必要としない」とし、これらの利点があるから「婦人達が数学に関心を持つはずだ」とし、女性達の中にはこの分野で成功した者が何人もいるとさえ言っている。¹⁶⁾ 十九世紀に強まる伝統的な女性の役割への固執を思わせる言説は案外少なく、男女に共通する論拠も援用されている所に、本稿筆者としては先進性を感じるのである。

若い娘も読者対象

ところで、この後、読者対象に関する記述が次のように続く。

「この文庫を成す様々な分野の一覧を素描する前に、最も細心の心遣いをする母親でさえ、とりわけ、社交界に入る直前の時期にある娘がこれを読むことに恐れを抱く可能性はないだろう、と予め申し上げておく。¹⁸⁾」

あらゆることが話題になるサロンでの活動に備える意味でも、こうした叢書が若いお嬢さんをも読者対象としていることは、足りない知育の補いとなってくれるはずであるから、母親としては有難いことであろう。しかし、この叢書には、保健医学や女性生理学の書もあり、¹⁹⁾ そこには、

性に関する記述もある。当時、若い娘の性的な無知 (innocence) は無垢 (innocence) を保証するものであるとみなされていたから、性に関する知識を隠避するのが普通であった。それならば、これは一体どうしたところか。実は、この文庫の趣意書に当たる序文の最後には、文庫に収められる予定の分野が提示してあるが、あくまでも予定であり、順次刊行される本のタイトルもまだ明記されていないのである。保健医学の書『家庭の医学』、あるいは簡単な健康維持法』(全三巻、一七九〇〜九二年)は、最初の予定にはなかった医学の分野が追加されて出版されたものであった。女性生理学の書は、『身体と精神から見た女性について』(全二巻、一七八八〜八九年)で、博物学の分野で出版されることになる。したがって、趣意書に当たる序文が執筆された時点では、こうした書物の出版がプランの中にあつたかどうか不明である。ポピュラー・サイエンスの流行は、女性達の関心を医学へも向かわせていたから、これは案外、読者からの要望に応えた結果なのかもしれない。

もっとも、著者は、当時の医学レベルの低さを反映した稚拙な女性論を展開し、偏見に満ちた女性神話の形成を導いた医師で生理学者のルッセルである。これらの書では、確かに女性を病人扱いし、女性の肉体的脆弱さを知的劣勢に結びつけるお決まりの記述もあり、思想界のルソーと共に、彼が後世のフェミニスト達から批判的にされたものも頷ける。しかし、特に保健医学の書は、子供や大人の一般の病気も含め、ほとんどが通常の保健衛生・医学上の知識で占められているのである。また、十九世紀末に出版された『女性に有益な知識の百科事典・手引書』という副題を持つ『女性と家庭の辞典』(二八九七年)²²ですら、性の知識を排除していたことを思えば、ルッセルの書が、生殖器官、月経、生殖システム、妊娠、出産などの知識を提供した行為そのものは、異例のことであり、この点だけは評価できるのではなからうか。たとえこれが、出版プランを遂行して行く過程で、文庫の当初の理念を失念した結果であつたとしてもである。

いつも貴女の身近に文庫を！

さて、この後序文は、書物のサイズについて、人気の版型の中でも、目を疲れさせない活字ということであれば「婦人達に最も気に入られていると思われる」ハンデイトイプの十八折版 (F18) を採用したとする。²³日本の文庫本サイズより小ぶりの十八折版は、この時代、まだ一般的ではなかった。知識の普及書としては、むしろ、これの二倍強ある十二折版 (F12) の方が多かったが、それなりに本の厚みも増すことになる。手軽で、さっと読めそうな大きさというのは、読者に威圧感を与えないというメリットがある。これは、寝椅子にでも横たわりながら片手で開いて持つのにちょうど良い大きさであり、ちょっとした外出時にも、一冊どこかに忍ばせておけそうである。十八折版というのは、出版文化が本格的に花開く十九世紀にポピュラーになるサイズであるから、この点でも時代を先取りしていると言える。

更に、トータル巻数は未定だが定期的に配本されることを記した上で、具体的な内容案内に先立つ前書きは、次のような言葉で締め括られている。

「この文庫が、最も長い旅においても、楽に、邪魔にならず運ばれることが可能であつて欲しいと思う、また、これが客間の装飾になつて欲しいと思う、最後に、この文庫からは決して離れられないというふうになつて欲しいと思う。」²⁴

フランスのあるニュースサイトによれば、フランス人の二人に一人が、夏のバカンス中には普段より多くの本を読むと言っているという。²⁵ましてや、テレビもスマホもない時代、例えば、田舎の所領地で夏を過ごす際、どんな本を持って行くかも、関心事のひとつであった。コンパクトサイズの叢書なら、まとめて運んで行くのもさして難しいことではない。持ち運び便利な文庫は、恰好の旅の友になるであらう。

なお、書物は当時、装丁は別料金で、購入者の希望により、仮綴じ本のままではなく、頁の端を切り揃えた上に、革の装丁に金箔で好みの模様を刻印するなどした。勿論、立派な装丁を施した本は、絵画や彫刻同様、客間の装飾にもなりえた。以前、筆者は、パリ近郊のシャンティイー城を見学した際、図書室で、煌びやかな宝石を象嵌した大型の美装丁本と出会い、その美しさに思わず見とれてしまった経験がある。要するに、序文の言葉には、「難しく考えなくていいのですよ。文庫は、インテリアにでもなさっていただけだと思います」と、叢書を買ひ揃える動機のハードルを下げて購入を促そうという意図が込められている。ちなみに、先のニュースサイトによると、バカンスは、特に自宅に溜まった本を読む機会でもあるという。客間の装飾の一部としてもよいから、とにかく文庫を揃えさえすれば、気の向いた時に、いつでも手に取ることができであろう。いや、訪れた人が、ふと書架に目をやって文庫のことを話題にした時、適切な応答ができないとまずいので、結局、本の頁を開かざるをえなくなるであろう。

一方、充実した内容の書物は、真に「つれづれ慰むもの」にして、まなならぬ生身の人間と異なり、いつでも対応可能な助言者、価値ある未知の世界への案内人役も果たしてくれるはずである。引用中の最後の文言は、この文庫が、多彩な分野で読者の要望に対応してくれる身近な友となりうることをアピールしているのではなかろうか。

野心的な「百科の小文庫」

さて、序の言葉で、様々な段階を経ながら、読者に文庫の世界へと足を踏み入れる心の準備をさせた後で、いよいよ、「旅行記」（地球全体についての概説に始まる世界地理で、携帯地図帳付き）、「歴史」（古代と近代）、「合集（*Mcanges*）」（フランス語文法と雄弁術、論理学、詩の分野など）、「演劇」、「小説」、「倫理」、「数学」、「物理学と天文学」、「博物学」（化学、植物学、鉱物学なども含む）、「芸術」の十分野（後に「医

学」が加わり十一分野となる）が、具体的な書物のタイトルや巻数までは明記できていないものの、それぞれ簡単なアウトラインを示す形で説明されることになる。

長くなるので、それぞれの詳細をここで紹介はしないが、例えば、世界地理を扱う「旅行記」では、旅行者の体験談に止まらず、風俗・習慣、法律、政府、宗教の歴史的経緯や土地の産物などの多面的な提示、「合集」では、母親による子供のフランス語教育への活用の可能性⁽²⁷⁾、「小説」では、名声が確立した作品のみ厳選、「数学」では、「物理学と天文学」に役立つ諸規則の提示に加え、当時人気の数学パズルの書の追加、「博物学」では、文庫では不足している知識の補完として科学百科事典の刊行など、実際には未完に終わったため、実現しなかったものもあるが、全体として、読者の有用性への関心や高い知識欲に応える内容になっている⁽²⁸⁾。

それにしても、先に引いた序文の文言にある「有益で好ましい知識全て」というのは、いかにも、野心的ではないか。出版社（パリのキュシェ）の出版・在庫案内カタログ（一七九二年）では、本叢書が、「婦人の百科文庫、あるいは、あらゆる学問の基礎知識を収めた百科の小文庫⁽²⁹⁾」として紹介されている。「百科の（*Encyclopédique*）」という表現は、ディドロの『百科全書』（*Encyclopédie*）を想起させるもので、知識の普及書としての野心の程が窺える。この事は、男女が共有するサロン文化を背景に、啓蒙の時代精神の女性への波及効果を例証するものである。後にゴンクール兄弟は、『十八世紀の女性』（一八六二年）で、「いかなる学問も女性に嫌悪感をもよおさせることはなく、最も男性的な学問にさえ、女性に誘惑され、魅了された⁽³⁰⁾」と、女性達の間で高まる学問ブームをこう表現することになるだろう。

なお、一七九二年当時、既に百巻を優に超える叢書が刊行されていたわけであるが、それでも、「小文庫」と控え目な言い方をしているのは、あの『百科全書』に比べたら、ささやかな叢書だと言いたかったのであらうか。確かに、文庫は、その規模も内容も、『百科全書』の比ではな

い。加えて、この文庫のレベルも一様ではないのだが、少なくとも、一般の普及書としても十分通用しそうな書が多く、「基礎的」というのは、専門家（あるいは専門家を目指す人）向きの知識ではなく、あくまでも教養として必要な知識のレベルのことを言っていると思われる。

ちなみに、文庫の一冊『婦人の天文学』（一七八五年）の序文で、著者の天文学者ラランドが、「これ〔私が婦人達の好奇心に応えて提供するさやかな書〕が、彼女達の幾人かを、この後、もう少し詳しい書物に移る気にさせ、宇宙の偉大な姿をもっとよく知って、これに感嘆してくれますように！⁽³¹⁾」と言っていることにも注目したい。つまり、教養レベルの知識の普及書は、より高度な書物への架け橋になりうるのである。その意味では、たとえ、ごく基礎的な普及書であっても、決して侮ってはならないであろう。

ギヤラントリーとリスクと

ところで、本稿は序文を問題にするので、叢書の細部への言及は控えるが、ラランドを始め、本叢書のために執筆した当時の錚々たる執筆陣⁽³²⁾は、皆男性である。問題の序文を執筆したのも、男性であろう。ここには男女の知的格差の問題に加えて、「書く」とか「教える」という行為は、まず男性の領域であったという現実がある。そして、女性読者の圧倒的な歓迎を受け続けた、フォントネルの『世界の複数性についての対話』（一六八六年）⁽³³⁾における、男性識者が貴婦人に、恭しくあるいは親しみを込めて天文学の手解きするという設定が、交際社会で重要なギヤラントリーの精神を体现した作品のプロトタイプとなり、これが継承されたという点も忘れてはならないであろう。⁽³⁴⁾これについては、フォントネルの書に影響された、ドゥムースチエの『神話についてのエミリーへの手紙』（一七八六〇年）⁽³⁵⁾やマルタンの『物理学と化学、博物学についてのソフィーへの手紙』（一八一〇年）⁽³⁶⁾など、同様のタイプの書が同じく爆発的成功を収め、とりわけ女性読者から歓迎され続けたという事実があ

る。『婦人の百科文庫』でも、第一叢書群の「旅行記」は、ある青年が旅先から「奥様（Madame）」に宛てた書簡形式を採用しているのである。もともと、それ以外は、通常の叙述スタイルを採用しており、その意味では上記の一連の書とは一線を画すものであるが、そもそも、男性識者が婦人達に知識の手解きができ、女性達に歓迎されること自体、女性の存在が重要なサロンに集う男性識者にとって名譽なことであつたに違いない。

他方、そうは言っても、出版は、現代以上にリスクを伴う事業であつた。確かに、男女間のある程度の知的基盤の上に成り立つたサロン文化の伝統と女性達の学問ブームを背景とした需要も、企画を後押しした可能性は高い。しかし、リスクを考えれば、読者対象を、「男女用」とか、最も一般的なやり方である読者の性別を明確にしないという選択肢もあつたはずである。敢て女性読者に絞った看板を掲げて、ビジネスチャンスを狭め、女性達の学びを励ます言説を展開する所に、本稿筆者は、男性識者達の心意気のようなものを感じるのである。

十九世紀の『婦人の百科事典』の趣意書をめぐって

『婦人の百科文庫』は、十九世紀初頭、パリの別な出版社（メナール・エ・ドゥゼーヌ・フィス）の出版・在庫案内カタログ（一八一九年）に、「この貴重な叢書は、その長所が十分知られており、婦人達だけでなく、僅かな費用であらゆる分野に亘る精選された蔵書を手に入れたと考えられている全ての人達にふさわしい」と特記されており、一般の普及書としても十分通用するものとして扱われている。この出版社は、この文庫の再版と販売を手掛けていたようである。

そして、女性の知育に関してはネガティブなイメージの付きまとう十九世紀前半、この文庫の影響下と思われる同じ小型版の『婦人の百科事典』（一八二一―一八三三）⁽³⁸⁾という、やはりテーマ別の叢書まで登場することになるのである。

一八二一年、第一巻に先立ってパリで出版された、このシリーズの趣意書である内容案内冊子の冒頭には、次のようにある。

「人の知識は、それがいかに果てしなく見えようと、言わば、ほとんど矛盾と詭弁と誤謬の海の中に失われたごく僅かな真実を基盤としているものである。これは、ベールをたった一卷に縮小しようとした、あのスケールの大きい慧眼の天才を備えたヴォルテールの意見であった。[……]『婦人の百科事典』は、こうしたばらばらな知識 (connaissances éparses) 全てを、ひとつの共通の集会場の中に集約することを目的とするものである。基礎的かつ欠ける所のない一連の論説叢書の中に、百科に亘る知識の体系 (système) 全体を包括すること、正確だが凝縮された画面の中に、学問全体をその果実と花をつけて、しかし棘のない形で提示すること、これが、ここで予告する、執筆者達が計画した書物全体のプランである。」⁽³⁹⁾

『婦人の百科文庫』の序文とは何という違いであろう。十九世紀は、不幸にも、女子教育を軽んじた軍人ナポレオンで幕を開け、サロンは復活したものの、それを取り巻く知的環境も時代の空気も、革命前とは異なる。にも拘わらず、女性読者を意識した箇所が見受けられるとはいえ、冒頭の書き出しは、一般向けの百科事典の序にしてもよい程の内容である。しかも、あの『百科全書』のデイドロによる項目「百科事典」にもあった、知識の統合と全体的な体系の提示への意図⁽⁴⁰⁾まで述べるとは！ 本稿筆者が、初めてこの趣意書の冒頭をフランス国立図書館の特別閲覧室で読んだ時、十九世紀の女性と知識をめぐる問題に関しては、お決まりの暗いイメージを抱いていただけに、新鮮な驚きを覚えたものである。

『百科全書』の出版は、テーマ別の形式によるものも含め、百科事典の出版ブームを巻き起こすことに繋がった。『婦人の百科文庫』同様、この叢書の企画は、その動きが女性にまで及んでいたことを物語っている。それは、タイトルにある「百科事典」(Encyclopédie)とこう語が、『百

科全書』(Encyclopédie)と、原語では同じだということからも分かるであろう。のみならず、前口上に続く分野別の叢書の内容案内は、『婦人の百科文庫』の序に比べ、より具体的に、分野別百科事典としてのより強烈な迫力が感じられるのである。⁽⁴¹⁾ただ、当時の女性読書は、案外こうした先進性に恐れをなしたかもしれないのだ。⁽⁴²⁾しかも、カトリックが再び国教となった反動の時代に、宗教的寛容を主張したベールや、よりによって教会が敵視してきたヴォルテールまでのつけから名前が挙がっているのである。尤も、ヴォルテールは、十九世紀前半もよく読まれていた。趣意書の文言には、前世紀の啓蒙の時代精神の継承が見て取れるであろう。しかし、残念ながら、この叢書は、結果的には、出版開始から僅か二年後、予定の約十二パーセントにあたる二十二巻で幕を閉じることになる。勿論、趣意書の文言だけが挫折の原因とは言えないであろう。しかし、それでも、革命の混乱が続く九三年まで刊行された『婦人の百科文庫』の序文に窺える、軽やかさの中に仕掛けられた、あのしなやかな巧みさを思わないではいられない。そして、少なくとも、革命後の時代から見れば、何とも羨ましい時代の反映も……。

モロッコ・サンド色にも似た明るい茶系統の趣ある革の装丁、そこには、金箔の細かな連続模様で優雅な縁取りが施してあり、脊の上から三か所、可愛らしい花が一輪、やはり金箔であしらわれている——これは、パリの古書店で見つけた文庫のうちの、まさしくあの第一巻。装丁は、十九世紀のものかもしれないのだが、中身は当時のもので、二百三十年以上の時を経ているのに、紙質もしっかりしている。フランス国立図書館で丹念に出版報の頁を繰る中で知ったこの叢書の現物を、こんなに優美な装丁が施された形で手にした時の感動といたら！ 革張りの表紙はすぐ手に馴染んでくれて、これを手に取ったかもしれない貴婦人の姿を想像しながら、その場で暫し深い感慨に浸ったことを思い出す。

十八世紀のフランスでは、女性のための様々な知識の普及書が出版されてきたが、⁽⁴³⁾未完ながら、一般の世俗の知識の普及書としても通用する内

容を、これ程の規模で提供したものはなかった。尤も、その背後には、当時の階級社会と知における格差の問題も存在していたことを忘れてはならないであろう。しかし、こうした文庫出版の一例が、男子に比べ女子の公教育整備の遅れが目立つ十九世紀前半に引き継がれ、先の叢書以外にも、本格的な女性用百科事典や、女子のための百科に亘る総合学習講座シリーズなどに引き継がれていったことも事実なのである。⁽⁴⁾

今、こうして自宅の書架の前で頁を開いていると、当時としては、女性用の知的啓蒙書の金字塔とも言えるこの文庫を世に送り出した男性識者達と、女性達の学問ブームを育んだサロン文化全盛の時代に、改めて思いを馳せてみたくなるのである。

注

- (1) *Bibliothèque universelle des dames*, in-18, 154 vol., Cuchet, 1785-1793. 本叢書については、拙著『フランスで出版された女性のための知的啓蒙書（一六五〇—一八〇〇年）に関する一研究——その特徴及び時代背景から十九世紀への継承まで——』（淡水社、二〇一〇年、第一〇〇—一三八頁）参照。この叢書は、フランス国立図書館が所蔵している。
- (2) 図版二巻 (*Atlas portatif*, 2 vol. (1786) 及び世界地図、主要な国別地図、星座、天体現象に関する図、天動説と地動説それぞれに基づく宇宙図が収められている。)を除く一五四巻の平均頁数は二九〇頁弱である。
- (3) ROUCHER (Jean-Antoine), *Loges*, tome 1, 1785, pp. 1 参照。
- (4) MOULÈRE, *Les Femmes savantes*, 1672. 尤も、この喜劇では、非常識で無能な男の似非学者も戯画化されており、術学趣味は、男性においても避けるべきこととされていた。にも拘らず、以後、十九世紀になっても、専ら女性の過ぎた学問好きを戒めるためにこの作品の例が引かれることになる。
- (5) POULAIN DE LA BARRE (François), *De l'égalité des deux sexes*, Fayard, 1984. この女性擁護論は「よく読まれ、何度か再版された」となる。(RABAUT (Jean), *Histoire des féminismes français*, Stock, 1978, p. 31 参照) プーラン・ド・ラ・バール (Poulain de La Barre, 1647-1725) は『男性の優秀性について、反男女平等』(*De l'excellence des hommes, contre l'égalité des sexes*, 1675) という書で女性の優秀性を論じていて、女性擁護の命題の論証そのものを楽しんでいたのかもしれないが、後にも影響を与える女性擁護論が世に出たという事実にごそ意味がある。
- (6) *Op. cit.*, p. 84 参照。但し、プーラン・ド・ラ・バールは、勉学で知性に磨きをかけた女性達が、学者達との対話に加わり、美と知性で彼らの上に君臨するだけで

なく、仕事に就いたり、夫から家の采配を任せられ、万事において助言を求められ、仕事に就けない状態になっても、その職務を理解し、職務が遂行されているか判断できる可能性にまで言及していたが (*ibid.* 参照)、『婦人の百科文庫』の序文は、そうした具体的な点にまでは言及していない。文化人が集うサロンに参加する女性達が、学者達の話を理解し、適切な受け答えが求められたのは事実だが、彼らを超えることまでは期待されていたわけではないし、ましてや現代のように仕事に就くということはありえなかったわけであるから、そこまで話を進めることは非現実的であったという事情がある。

- (7) PUISIEUX (Madeleine d'Arsaint de), *Conseils à une amie*, [sans lieu], 1749, p. 37 参照。ピューイユ (Puisieux, 1720-1798) は、更に「知性なき美は危険な結果をもたらす」(*ibid.*, p. 38) とよく言っている。
- (8) PERRAULT (Charles), *Riquet à la huppe*, in *Histoire ou Contes du temps passé. Avec des Moralités*, 1697.
- (9) デーニエ (Honoré DAUMIER, 1808-1879) は、有名な風刺新聞『ル・シャリヴァリ』(*Le Charivari*) に一連の風刺画『ブルー・ストッキング達』(*Les Bas-bleus*, 1844) や『女性社会主義者達』(*Les Femmes socialistes*, 1849) を発表している。
- (10) *Op. cit.*, p. 1 参照。
- (11) *Traité de la prononciation in Mélanges*, tome 2, 1785, p. 113 参照。なお、『発音概論』は、『綴り字概論』(*Traité de l'orthographe*) 及び『作詩法概論』(*Traité de la versification*) と共に『合集』の第2巻に収められている。
- (12) SIGAUD DE LAPOND (Joseph-Aignan), *Physique générale*, tome 1, 1788, pp. v-vj 参照。
- (13) *Op. cit.*, pp. 1-2 参照。「ある文学者グループ」の詳細は、目下の所不明である。
- (14) ゴンクール兄弟は「十八世紀の女性」(一八六二年)で次のように言っている。「思索や精神に関する様々な事柄にたくも忙殺されるこの社会にあつては、それぞれ、図書室のあるあした邸宅や城館で、女性読者は読書によって自身に力をつけるのだ。[...]」女性読者は書物の空気の中で生き、書物によって支えられる。したがって、彼女の書簡には、自身が書物に求める真面目な気晴らしや、最も重たい書物、哲学書、歴史物語から汲み取る滋養全てが絶えずはつきり表われるのである ([...]「」) (GONCOURT (Edmond et Jules de), *La Femme au dix-huitième siècle*, nouvelle éd., Charpentier, 1878, pp. 398-399 参照)。
- (15) LEZAY-MARNÉSIA (Claude-François-Adrien, marquis de), *Plan de lecture pour une jeune dame*, 2^e éd., A. Fichier & Luc Vincent, 1800, p. [1] 参照。ルゼ＝マルネシア侯爵 (marquis de Lezay-Marnésia, 1770-1814) は、外交官や知事を歴任し、教育問題に関心をもち、後にストラスブールで初等学校の師範学校を設立した人物である。
- (16) MONGEZ (Antoine), *Arithmétique*, tome 1, 1789, pp. iv-v 参照。

- (17) 伝統的役割に注目した学びの奨めとしては、例えば、保健医学の書『家庭の医学』、あるいは簡単な健康維持法』の序文は、自身のためであることは勿論だが、女性は「子供の最初の医師」の役目を運命づけられていると共に、「事故や病気の際、夫や召使い、隣人」に対しても応急処置をするのはまず女性であるから、医療上の知識が必要だと主張している。(ROUSSEL (Pierre), *Médecine domestique, ou Moyens simples de conserver sa santé*, tome 1, 1790, pp. 6-9-参照) 母・主婦としての役割のために、女性が保健医学の知識を持つべきだというのは、現代から見れば、性別役割の固定化を容認しているという批判もあるだろう。ただ、他方で、女性の学習動機が限られている時代にあつては、多くの女性達にとって、保健医学に限らず、それが知識に接近する機会として働きたとも考えられる。
- (18) *Op. cit.*, p. 2 参照。
- (19) 保健医学の書は、『家庭の医学』あるいは簡単な健康維持法』(ROUSSEL (Pierre), *Médecine domestique, ou Moyens simples de conserver sa santé*, 3 vol., 1790-1792) 女性生理学の書は、『身体と精神から見た女性について』(ROUSSEL (Pierre), *De la femme, considérée au physique et au moral*, 2 vol., 1788-1789) である。
- (20) ルッセル (Pierre ROUSSEL, 1742-1802) は『家庭の医学』で、「私がそれら〔いくらかの助言〕を書きとめているこの叢書は、女性用であるから、女性達が最初にそうした助言を受ける対象となるのは当然である。事実、女性達は、女性の本性とその体質ゆえに、男性よりも多くの病気に罹りやすく、男性よりも一層助言が必要なのである。よって、私は、女性の健康について書き、女性の気質の範疇と女性に特有の生来の機能に由来する病気を扱うところから始める」(ROUSSEL, *Médecine domestique*, tome 1, 1790, p. 5 参照) としている。但し、本書で、女性に限らず、子供と大人一般の病気も大きく扱っている。
- (21) 『身体と精神から見た女性について』では、例えば「女性の諸器官のあのか弱さ」が「抽象的な学問に必要なあの精神統一の努力を不可能にする」としている。他方で、女性の持つ生来の愛情深さや慈悲心、感受性、直感力などを評価しており、女性読者は必ずしも反発を覚えなかった可能性が高い。(ROUSSEL, *De la femme, considérée au physique et au moral*, tome 1, 1790, pp. 46, 49-50 他参照)
- なお、本書は、同じくルッセルによる『女性の身体と精神の仕組み』(*Système physique et moral de la femme*, 1775) をほぼそのまま踏襲したものである。これは当時最新の女性生理学の普及書で、成功を博し、十九世紀にも版を重ねた。
- (22) CERBERER (Gaston) et RAMIN (M. V.), *Dictionnaire de la femme et de la famille*, Firmin-Didot, 1897. なお、本書に引くのは、その第二版に関する拙論「十九世紀末のある女性用百科事典」〔『ガリア』第三十一号、大阪大学フランス語フランス文学会、一九九二年、第三三七-二四六頁〕参照。
- (23) *Op. cit.*, pp. 2-3 参照。
- (24) *Op. cit.*, p. 3 参照。
- (25) Francine の二〇一九年八月三日の記事「Cahier de vacances. Le bouquin de page」による。
- (26) 序文では「Belles Lettres に充てられる分野」(*Op. cit.*, p. 7 参照) としているが、綴り字法や神話なども想定されている。
- (27) 子供の教育者としての女性という考えは、母性重視の十九世紀に強まる考え方であるが、これは性別役割の固定化という側面がある一方で、学習動機の限られていた女性達にとって、知識を獲得する機会であると共に、時にその口実にもなったとも考えられる。
- (28) *Op. cit.*, pp. 4-12 参照。
- (29) « Bibliothèque Universelle des Dames, ou petite Bibliothèque Encyclopédique, contenant les Eléments de toutes les Sciences » (*Catalogue des livres du fonds de Cuchet*, [1792] 参照) からの出版・在庫案内カタログは、フランス国立図書館所蔵。
- (30) *Op. cit.*, p. 427 参照。
- (31) LALANDE (Joseph-Jérôme de), *Astronomie des dames*, 3^e éd., Bidaul, 1806, p. 34 参照。ランダンの書は、十九世紀も読み継がれ、一八二二年には、第七版が出た。
- (32) 『婦人の百科文庫』の執筆者には、有名な農学者バルマンチエ (Parmentier, 1737-1813) や外科医で物理学者のシゴード・ラフォン (Sigaud de Lafond, 1730-1810) 科学アカデミーの会員で、コレージュ・ド・フランスの天文学の教授でもあったランド (Lalande, 1732-1807) 科学アカデミー会員の化学者フルクロワ (Fourcroy, 1755-1809) 当時成功を博した詩人で劇作家、小説家のアンベール (Imbert, 1747-1790) などがある。
- (33) FONTENELLE (Bernard Le Bovier de), *Entretiens sur la pluinlité des mondes*, 1686. 本書については、本稿の注(一)の拙著(第八二-八四頁) 参照。
- (34) ギャラントリーの精神の継承とまでは言えないが、現代にも類似的系譜として、スウェーデンの哲学教師ヨースタイン・ゴルデルによる世界中で大成功を博した『ソフィーの世界』(Jostein Gaarder, *Sofies verden*, 1991) や、現在ベストセラーになっているギリシャの経済学者ヤニス・バルファキスの『父が娘に語る経済の話』(Yanis Varoufakis, *Talking to My Daughter About the Economy*, 2017) がある。今後、女性哲学者が少年に哲学を、母親である経済学者が息子に経済学を語るという設定の書が現れることはあるだろう。
- (35) DEMOUSTIER (Charles-Albert), *Lettres à Emilie sur la mythologie*, 4 vol., 1786-1790. 本書に引くのは、本稿の注(一)の拙著(第八四-八五頁) 参照。
- (36) MARTIN (Louis-Aimé), *Lettres à Sophie sur la physique, la chimie et l'histoire naturelle*, 2 vol., 1810. 本書については、拙論「ルイ・エメ・マルタンの『ソフィーへの手紙』について」〔日仏教育学会年報〕第十五号、二〇〇九年、第八二-九二頁〕参照。
- (37) *Catalogue des livres du fonds de Menard et Desorme, fils*, 1819, p. 3 参照。メナール・エ・

ドゥゼーヌ・フィス (Menard et Desenne, fils) のカタログは、フランス国立図書館所蔵。なお、一八二二年に同社より再版されたラランドの『婦人の天文学』(第七版)の表紙の裏頁には、「本書は、『婦人の百科文庫』(一五四巻、十八折版)の一冊で、この文庫はメナール・エ・ドゥゼーヌ・フィスにある」(LALANDE, *Op. cit.*, 7^e éd., Menard et Desenne, fils, 1821 参照)と記載されている。

- (38) *Encyclopédie des dames*, in-18, 22 vol., Audot, 1821-1823. 本叢書については、拙論「フランスの『婦人の百科事典』の企画と出版をめぐるその限界と意義について」(『女性学』第二号、日本女性学会学会誌編集委員会編、新水社、一九九四年、第一〇四-一二〇頁) 参照。この叢書も未完で、出版報で出版が確認できた二十二巻中十九巻をフランス国立図書館が所蔵している。

- (39) *Encyclopédie des dames*, prospectus, Audot, 1821, pp. 3-4 参照。引用にあるペール (Pierre BAYLE, 1647-1706) は、フランスの哲学者、批評家。十八世紀の啓蒙思想家達に影響を与えた。出版・販売を手掛けたバリのオド社から出たこの趣意書は、フランス国立図書館所蔵。

- (40) 「百科事典の目的は、この世のばらばらな知識 (connaissances éparées) を統合することであり、我々と共に生きる人々に与えた知識の全体的な体系を提示し、我々の後からやって来る人々にその体系 (système) を伝えることである」(DIDEROT, *Encyclopédie*, tome 2, Flammarion, 1986, pp. 40-41 参照。) とある。引用文中、原語で併記した「ばらばらな知識」と「体系」が、『婦人の百科事典』と『百科全書』で共通しているという点にも注目したい。

- (41) この趣意書には、前書きに続いて、出版予定の具体的な書物のタイトル、巻数、著者名、中身の概要が、それぞれ「科学」、「家政」、「歴史(地理)」、「神話誌(histoire mythique)」、「諸民族の歴史」、「美術」、「文学」の分野ごとに紹介されており、「各事典の内容は実に多彩で、数学と力学の基礎、天文学、自然学、化学、発明発見史、博物学、生理学、保健、体育、装い、家政、地図(地理及び天文学の)、地理、神話、古代史、フランス及びイギリス、アメリカ合衆国、イタリア、トルコ、インド、中国、日本などの歴史の他、美術、音楽、舞踊、古代文学、フランス文学など実に幅広いテーマにわたる知識を提供しようという意欲が窺える」(注(38)の拙論、第一〇四頁) ものである。

- (42) 「百科事典(encyclopédie)というタイトル名そのものが、『百科文庫』(bibliothèque universelle) より『百科全書』(Encyclopédie) を直接想起させるため、「女学者用」を危惧する女性読者から受け入れられにくかったということも考えられる。しかし、百科事典の出版ブームの波に乗って、基礎的な内容ながら、『子供の百科事典』(*Encyclopédie des enfants*, 1806) など、『百科事典』の名を冠した子供や若い人向けの出版物が、既に一八二〇年代以前に存在していた。女性用も同様で、一八〇六年の『婦人の百科事典、女性の知育のための書』(*Encyclopédie des dames, ouvrage destiné à l'instruction du beau sexe*, 1806, Guyon, Maisson et Gervais, 1806) 4

ど、『百科事典』(encyclopédie) のタイトル名のある女性用の知識の普及書が世に出ていたのである。但し、これらは、真にその名に値するものとは言えなかったことも事実である。一八〇六年の書については、拙稿(研究ノート)「婦人の百科事典」(一八〇六)について(『女性空間』第十号(創刊十周年記念特別号)、日仏女性資料センター、第二一九-二四頁、一九九三年) 参照。

- (43) 当時の女性のための知識の普及書については、注(1)の拙著第三章参照。
(44) 十九世紀前半の本格的な女性用の百科事典としては、一八四一年にパリで出た、アルファベット順による百科事典『婦人と若い娘のための会話辞典』(DUCKETT (William), *Dictionnaire de conversation à l'usage des dames et des jeunes personnes*, in-12, 10 vol., Belin-Mandarin, 1841) がある。タイトルにも拘わらず、これは歴としたアルファベット順による百科事典である。本書については、拙論「七月王政下のある女性用百科事典——女性のための知的出版物に見る女子啓蒙の試み——」(『日仏教育学会年報』第三号、日仏教育学会、第六九-八四頁、一九九八年) 参照。また、女子用の百科に亘る学習講座シリーズとは、『女子のための完璧な教育講座』(*Cours complets d'éducation pour les filles*, in-8, 23 vol., Hachette, 1837-1844) である。